図—1 林 班 区 分 図

級以内の若い造林地が拡大しつつあり，尚武沢地区には，下刈り対策を含めて，昭和55年度より積極的な新植地放牧が開始された。今後こうした林産と山地畜産との協調は，東北地方丘陵地利用の方向性を考える上での一つの材料を与える。

図—3に昭和51年～同56年における素材生産実行量を示した。広葉樹素材生産は，昭和51年から同53年までは指定量を下回るものの，同54年度からの新植地拡大をはかった伐採により，指定量の7,607m^3をほぼ満たした。針葉樹生産も指定量とのあいだに年次的な較差があるが，6年間の合計伐採量（約800m^3）では，ほぼ計画どおり実行された。

図—4にには，昭和52年～同56年におけるきのこ生産量を示した。きのこ生産は従来シイタケとナメコを主体にしていたが，56年度からはナメコ生産を減少させて，榾木の自給によるシイタケ生産に主力をおき，さらに55年度より開始したマイタケ生産の事業化に取り組んでいる。